

天草と「島原大變」

～「島原大變肥後迷惑」の記録と記憶Ⅱ～

古来より多くの災害に見舞われてきた人々は、被災の記憶と追悼の念を後世に伝えようとしてきました。寛政4（1792）年、普賢岳噴火に伴う眉山の山体崩壊により大津波が発生すると、その影響は対岸の天草・熊本にも及び、甚大な被害をもたらしました。

前回(企画展Ⅳ—「島原大變肥後迷惑」の記録と記憶—)は島原の被災の記録と供養塔を取り上げました。それを受けて本企画展では、天草側に分布する供養塔を取り上げ、「島原大變肥後迷惑」が天草にもたらした影響と、その記憶の継承を紹介します。

ごあいさつ

雲仙岳では寛政3（1791）年から地震が頻発、住民が不安を抱えるなか、寛政4（1792）年1月18日には噴煙があがった。この噴火によって、溶岩が周辺地域に流れ、その後も、有感地震はおさまる兆しがなかった。こうして、4月1日夜、島原地方を大規模地震（マグニチュード6.4）が襲う。これにより、雲仙岳の東側にある眉山の山体崩落が起こり、土石流が有明海に流れ込んだ。

すると、大津波が発生し、天草や熊本、宇土、玉名、荒尾などにも被害をもたらした。これにより、約15,000人もの死者や多くの負傷者を出し、家屋・蔵が流失、牛馬も流死した。島原半島にとどまらず、対岸の熊本にも被害を及ぼしたことから、この一連の被災は「島原大變肥後迷惑」と言われた。未曾有の被害をもたらした災害を後世に伝えるため、数多くの記録物が作成され、被災地には、流死者を悼んだ供養塔も建立された。これらの供養塔は、島原藩が命じたもの、村の有志によるもの、僧侶が建立したものなどが現存している。

雲仙普賢岳は平成2（1990）年11月17日に噴火したことを機に、翌年5月15日には水無川で土石流が発生し、6月3日の大規模火砕流では、43名の死者・行方不明者があった。また、平成28（2016）年4月14日、同月16日に発生した熊本地震は、我々の記憶に新しい。島原・天草・熊本では、近年、幸いにも津波被害は出ていないが、かつての災害の史実を認識しておくことは、防災意識を醸成するうえでも肝要である。

本企画展は、船の科学館・日本財団の海の学び調査・研究サポート「長崎・熊本両県における自然災害（地震・噴火・津波）に関する総合調査—寛政4年「島原大變肥後迷惑」の文献・慰霊碑を中心に—」（研究代表：安高啓明）の助成をうけて実施することができた。調査研究分担者の松本博幸（天草市）・吉田信也（島原市）には多大なご協力を得た。また、日本史研究室に所属し、将来、学芸員への就業を希望する大学院生・学部生も、調査から展示に至るまで参加し、実践教育の機会として本事業を実施することができた。本事業にご協力いただいた関係各位に衷心よりお礼申し上げます。

平成31年3月29日
熊本大学大学院人文科学研究部
准教授 安高啓明

I 天草の供養塔の分布

ここでは天草各地の供養塔の分布を紹介します。島原側では、藩の指示によって多くの供養塔が建立されましたが、当時島原藩の預地であった天草では、地域の人々の篤志によって溺死者が弔われました。

『肥後国絵図』

年代：元治二(1865)年

作成：不明 所蔵：安高研究室

江戸時代、肥後国(熊本・天草)の行政地区を記した絵図です。現在の地図と異なり、南側が上を向いています。▲で示した眉山が崩壊し、海を隔てた熊本県沿岸と天草の広範囲に被害が及びました。分布図と比べると、天草の西部まで島原大變の影響が及んでいることがわかります。



島原半島の供養塔

-流死菩提供養塔碑文-

建立：島原藩 年代：寛政5(1793)年

島原大變の翌年2月28日、溺死体が多く打ち上げられた地に藩の命令で建てられました。7つの同形・同碑文の供養塔が現存しており、島原半島の東側の海沿いに点在します。この供養塔は島原市南崩山町にあり、島原市の指定有形文化財です。



流死菩提供養塔碑文

前面

流死菩提供養塔

左側面

高波

寛政四年壬午四月朔日

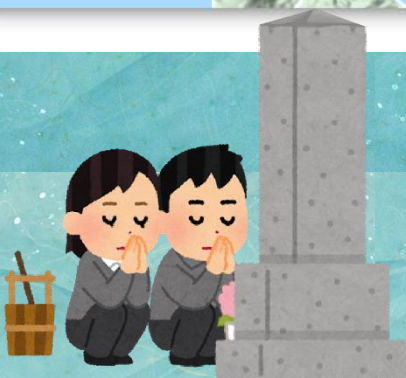
法量

高さ：180cm
横幅：59.5cm
奥行：42cm

注目!

天草供養塔分布マップ

天草に点在する供養塔の分布図です。島原に建立された供養塔には、眉山の崩壊による「圧死」や「流死」といった表現が碑文に刻まれています。天草の場合は、漂着した溺死者を弔ったものが多いため、「溺死」という言葉が使われています。また供養塔の石材には、天草で産出された砂岩などの自然石が用いられています。



II つなぐ記憶と供養塔

災害後、大津波などで流されて亡くなった人々が、天草沿岸に漂着しました。地域の人々は、溺死者を弔うために、供養塔を建立します。ここでは、天草に分布するものの中から、碑文の状態が良い2基を、拓本を通して紹介します。

「天草市五和町津波供養塔」

年代：寛政癸丑(1793年)夏四月朔

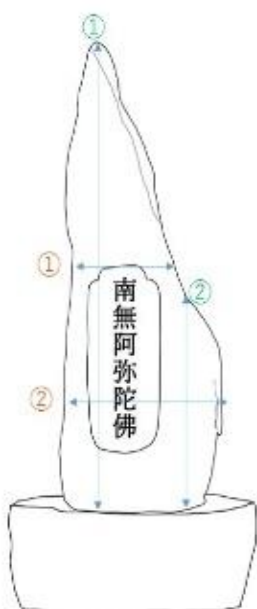
場所：天草市五和町御領大島若宮公園内
(分布マップA)

碑文作成：光台山浄専寺

島原大變の津波によって、大島沿岸に百人余りの溺死体が打ち上げられました。災害の翌年、その供養として、小山某が費用を捻出して建立したものがこの供養塔であると碑文に記されています。近辺にあったものが移築されて、現在は若宮公園内にあります。



天草市五和町御領大島津波供養塔



法量

高さ：①135cm
②63.3cm
横幅：①30cm
②48cm
奥行：28.5cm

碑文(背面)

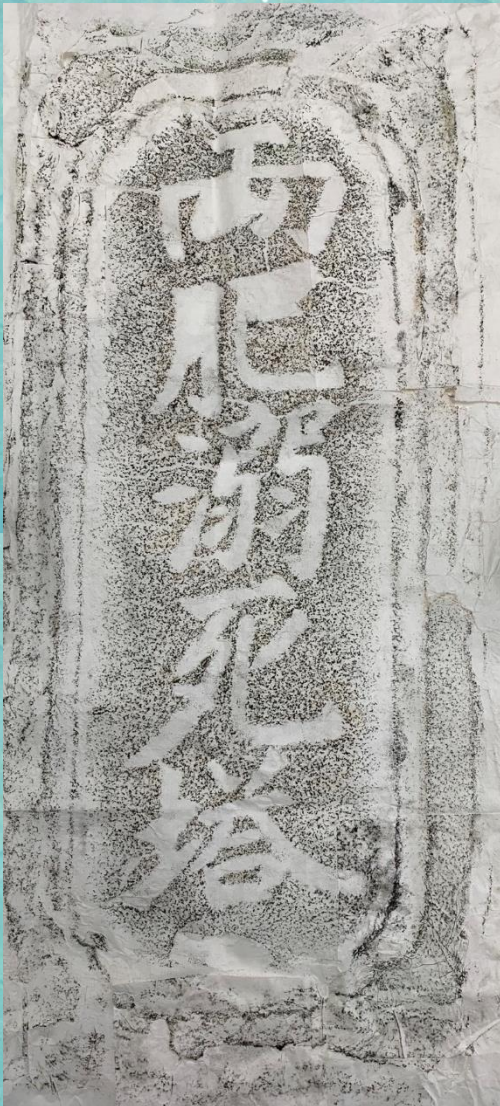
寛政壬子夏四月朔島原水災死骸漂流到置海濱都一百人
爰有小山某者□悼其不幸而橫死皆悉收拾死骸合葬以築
墳墓出貨供養三寶祈求追福焉而請余話其事因書此刻其
碑上云 寛政癸丑夏四月朔 光臺山人靈燈題

「両肥溺死塔」

年代：寛政四壬子年(1792)四月初一日

場所：天草市苓北町瀬川宇和田(分布マップB) 建立：不明

両肥、すなわち「肥前(島原)」と「肥後(天草・熊本)」の溺死者を弔った供養塔です。両肥という表現は、島原の供養塔には見られませんが、天草では多数確認されています。観音堂内に祀られており、現在でも同地区で管理されています。



「両肥溺死塔」碑文

観音像法量

高さ：74.5cm
横幅：29.5cm
奥行：27cm

碑文法量

高さ：73.5cm
横幅：30cm
奥行：25cm



船の科学館平成30年度 PROGRAM 3 「海の学び調査・研究サポート」採択事業

長崎・熊本両県における自然災害(地震・噴火・津波)に関する総合調査

—寛政4年「島原大変肥後迷惑」の文献・慰霊碑を中心に—

研究代表：安高 啓明(熊本大学大学院准教授)

作成：長屋 佳歩・山下 葵(熊本大学大学院)

川端 駆(熊本大学)